

12. 被服作品評価における新評価方法の客観性について (第2報)

郡山女子短大 関口 富左
○門馬 寿子

1. 被服作品指導において、技術上達を経験的繰返しに俟つことは、本科の学問的位置づけより見ても、改善研究を要するところである。演者等は、被服作品に作者の性格が移ることから新評価方法を創案し、これにより数次にわたりその成果を発表したが、今回は新評価方法による製作者の自評について追求し、これに内在する諸要因を類別整理し、工作指導原理確立の一助にすると共に、新評価法の客観性の検討を行うものである。

2. 資料……大裁女物単衣長着 100例

被実験者……郡山女子短期大学家政科第1学年学生

100名

方法 被検者に大裁女物単衣長着を製作せしめ、新評価方法により各自評価させる。次に指導者によって各作品を評価し、師評と自評との相違点を検する。①作品上の各評定点における洗練、正確、完全の3点よりの比較。② Technique Profil との関係。

3. 作品指導上(製作上)に於て製作者がいかなる理解と施工とによって作品を完成するか自評の実験を検し評定者のもつ限界、即ち評価上の誤謬点を把握し、本評価の客観性を高めることに役立つことが出来る。更に製作者の作品理解の断面と、それによる性格転移の一面を「作品による性格テスト」より究明し、性格と作品の関係を一層明らかにするに至った。